

[論文]

短期大学生の乳児や乳児保育に対する考えに関する一考察
—授業前後での変化に着目して—

鳥海 弘子
浅井 拓久也

A Study on Junior College Students' Image of Infants and Infant Care:
Focusing on Changes of Before and After Lecture on Infant Care

Hiroko Toriumi
Takuya Asai

キーワード：乳児・乳児保育・養護・健康

Key Words : Infant, Infant care, Nursing, health,

要約：本研究の目的は養成校の学生が乳児に対してどのような考えをもっているか等、学生のもつ乳児保育に対する考えについて、養成校入学直後と前期授業の終了後における変化を明らかにすることであった。分析結果として、①授業の初回では、大人の支援を必要とする未熟な存在や純粹で無垢な存在という回答が特徴的であったが、最終回の授業では子どもが大切な存在であるという回答が多くなっていたこと、②最終回では授業の最終回には初回に見られなかった「健康」や「命」という言葉が見られたこと、③最終回は子どもや乳児の「病気」「健康」「予防」「体調」という言葉が出現していたことが明らかとなった。

1 はじめに

2017 年に保育所保育指針が改定された。この改定では、乳児保育（保育所等における乳児の保育を指す：以下、乳児保育）に関する変化は大きかった。具体的には、乳児保育は従来の 5 領域ではなく、身体的発達の見点「健やかに伸び伸びと育つ」、社会的発達に関する見点「身近な人と気持ちが通じ合う」、精神的発達に関する見点「身近なものに関わり感性が育つ」の 3 つの見点を取り入れられた。また、第 2 章の「保育の内容」では、乳児と 1 歳以上 3 歳未満児の区分が新たに示された。

このような変化の背景には、乳児保育の重要性が高まっていることがある。「保育所等関連状況取りまとめ（令和 3 年 4 月 1 日）」によると、保育所等利用児童数は 0 歳児 146,361 人 (5.3%)、1.2 歳児 958,974 人 (35.0%) となっており、低年齢児の保育所等利用が高まり続けていることから、保育所での乳児保育はますます重要になってきている。多くの子どもが家庭で育つか幼稚園に通うという時代とは異なり、低年齢児が保育所に通うことが常態化している時代では、保育所での乳児保育の重要性がこれまで以上に高まっていくのであろう。

また、「保育所保育指針解説」にあるように、乳幼児期には自制心や GRIT のような社会情動的な側面の成長が著しいこと等から、これまで以上にきめ細やかな乳児保育が求められるであろう。

以上を背景にして、保育者養成校でも 2019 年 4 月より、保育士養成課程新カリキュラムがスタートした。保育士養成課程等検討会（2017）の報告では「『乳児保育』（養成校における科目名を指す：以下、「乳児保育」）に関する内容を充実し、教育効果を高めるためには、演習科目に加えて、講義科目を新設し、当該保育に関する理念や現状、保育の体制など、必要となる基礎的事項について理解を深めた上で、具体的な保育の方法や環境構成等を学び、より円滑に保育の実践力の習得につなげていくことが必要である。併せて、複数の科目に含まれる関連する教授内容等を体系的に整理し、関連性を明確にすることが必要である。」ことが示された。「乳児保育」に関する関連科目である「子どもの保健」は乳児の身体的な発育・発達について捉えた上で病気の看護の見点を捉えることが求められている。

今後の「乳児保育」の授業の質向上のために、「乳児保育」の教授方法や内容について検討がなされる必要がある。「乳児保育」では以下の内容を教授することが求められている。

保育者養成校での「乳児保育 I 講義 2 単位」の目標

1. 乳児保育の意義・目的と歴史的変遷及び役割等について理解する。
2. 保育所、乳児院等多様な保育の場における乳児保育の現状と課題について理解する。

3. 3 歳未満児の発育・発達を踏まえた保育の内容と運営体制について理解する。

4. 乳児保育における職員間の連携・協働及び保護者や地域の関係機関との連携について理解する。

「乳児保育Ⅱ演習 1 単位」の目標

1. 3 歳未満児の発育・発達の過程や特性を踏まえた援助や関わりの基本的な考え方について理解する。

2. 養護及び教育の一体性を踏まえ、3 歳未満児の子どもの生活や遊びと保育の方法及び環境について、具体的に理解する。

3. 乳児保育における配慮の実際について、具体的に理解する。

4. 上記 1～3 を踏まえ、乳児保育における計画の作成について具体的に理解する。

この多岐に渡る内容を短期大学生は 2 年間で学ばなければならないのである。科目ごと単独で完結する内容ではなく、学ぶ内容の繋がりや積み重ねが必要となっている。そのため、新カリキュラムを踏まえて、「乳児保育」の教授方法や内容について検討がなされる必要がある。

先行研究において乳児保育の環境（阿部 2002、田中ら 2005、村上 2009）や乳児と保育者の愛着関係（上田 2002、初塚 2010、上田ら 2020）、乳児の健やかな育ちに大切な環境や愛着関係について報告されている。しかし、これらは学生自身の乳児や乳児保育に対する考えを明らかにしたものではなかった。「乳児保育」を受講する学生自身のこれらを明らかにし、それらを踏まえた授業の展開が重要になるろう。

そこで、本研究では、その最初の取り掛かりとして、養成校の学生（以下、学生）が乳児や乳児保育に対してどのような考えをもっているかについて、養成校入学直後と「乳児保育」の関連科目である「子どもの保健」の授業をすべて受講した後の変化を明らかにすることを目指した。

2 研究方法

(1) 調査概要

本研究の調査対象者は、首都圏にある保育者養成校（短期大学）の 1 年生とした。調査は、筆者の一人が担当している「子どもの保健」の初回と最終回の授業で行った（2019 年 4 月及び 7 月）。

調査方法は質問紙調査とした。質問項目は、①「乳児とは（ ）な存在である。」、②「だから、乳児を保育する際は（ ）が最も大事である。」、③「乳児保育の授業を通して、あなたが最も学びたいことは何ですか。」（最終回では、「乳児保育の授業を通して、あなたが最も学んだことは何ですか。」）の 3 つとした。こうした質問形式は回

答を制限することもあるが、自由記述の分析の経済性を考えて採用した。質問紙への回答は学生自身のスマートフォンによって行った。

「子どもの保健」の授業内容及び目標を表 1 で示した。

表1 子どもの保健 授業内容及び目標

授業内容	子どもの心身の健康、身体発育・発達を理解する。 子どもの病気と対応、感染予防、慢性疾患、病児保育、母子保健、虐待、他職種との連携など組織としての健康支援を学び、保育者として必要な基礎知識を習得する。 様々なケースをDVD・動画・写真・スライドなどで紹介する。
到達目標	1. 子どもの心身の健康増進を図る保健活動の意義を理解している。 2. 子どもの身体発育・発達と保健について理解している。 3. 子どもの心身の健康状態とその把握の方法について理解している。 4. 子どもの疾病とその予防及び他職種間の連携・協働の下での適切な対応について理解している。
第1回	子どもの保健 オリエンテーション
第2回	子どもの発育と保健①子どもの身体発育と運動機能の発達
第3回	子どもの発育と保健②生理機能の発達と生活習慣
第4回	地域における保健活動と子どもの虐待防止小テスト（1～3回の内容15分間）
第5回	子どもの健康状態の観察と体調不良時の把握
第6回	子どもの病気①子どもの免疫の発達と感染症の特徴
第7回	子どもの病気②感染症の予防及び適切な対応
第8回	子どもの病気③救急疾患の特徴と適切な対応小テスト（5～7回の内容15分間）
第9回	子どもの病気④新生児の病気、先天性の病気の特徴と対応
第10回	子どもの病気⑤アレルギー疾患の特徴と適切な対応
第11回	子どもの病気⑥慢性疾患の特徴と適切な対応
第12回	保護者との情報共有と家族の支援小テスト（8～11回の内容15分間）
第13回	子どもの健康診断と関連機関との連携
第14回	子どもの保健 試験第1回～13授業内容
第15回	子どもの保健 総理解

(2) 分析方法

分析に使用するデータについては以下の通りである。初回の授業の出席者は 134 名であったが、同一回答者による重複した回答、回答者名以外は空白の回答を除外したところ、①と②は 130 件（97%）、③は 129 件（96%）となった。また、最終回の授業の出席者は 121 名であった。ここから先と同様の調整をしたところ、①は 115 件（95%）、②は 113 件（93%）、③は 107 件（88%）となった。

なお、データ内の明らかな誤字や脱字は執筆者の判断で修正した。

また、「子ども」と「子供」のような同一の意味を示す言葉はどちらかに統合した。分析方法として、KH Coder を用いたテキスト分析を行った。具体的には、授業の初回と最終回の違いを明確にするために、初回と最終回それぞれの記述に登場する特徴語の抽出を行った。これは、共起ネットワークよりも差異がわかりやすいことから採用した。

(3) 倫理的配慮

調査対象者が質問紙に回答する前に、本研究の目的と概要、回答の内容は授業の成績とは関係がないこと、回答を論文に掲載する際は回答者が特定されないこと等が、執筆者の一人から口頭で説明された。回答の提出をもって、同意を得たとした。なお本研究は秋草学園短期大学の研究倫理委員会にて承認を得た。(承認番号 2019-15)

3 結果と考察

(1) 「乳児とは () な存在である。」

表 2 は、質問項目①に対する回答の特徴語を示したものである。

授業の初回では、大人の支援を必要とする未熟な存在や純粋で無垢な存在という回答が特徴的であった。一方で、最終回の授業では初回と同様に大人の保護を必要とする守るべき(保護すべき)弱い(未熟でデリケートな)対象であるという記述も見られるが、乳児が大切な存在であるという回答が多くなっていることがわかる。これは、様々な授業を学んだ結果、乳児の存在の大切さをいっそう認識したからこそ、乳児は最も大切な存在であることを実感する結果になったと推察される。

授業の内容を振り返ってみても、「子どもの保健」の授業では母親の胎内での発育から出生の過程を学び生命の誕生の神秘的な感動を踏まえて、母と子の絆、愛着形成を実感できるようにしてきた。その上で身体的発育と運動・生理機能の発達を月齢ごとに学び、発育の評価の方法を学んでいる。そして授業の課題として、自分自身の母子健康手帳から、自分の成長の過程を確認することや母親から自身の成長過程について確認することとした(なお、母子健康手帳が無い場合も想定して他の課題を設定した)。この学びの実践により、自分自身がとても愛されて育てられたことを再度実感したことから、乳児は「大切」に「大事」に「守る」存在であることを実感する結果となったのではないだろうか。

表 2 「乳児とは () な存在である。」の特徴語

初回		最終回	
必要	.094	大切	.284
天使	.076	大事	.106
癒す	.053	繊細	.060
貴重	.030	保育	.051
純粋	.023	未熟	.050
未完成	.023	デリケート	.044
特別	.023	守る	.034
未来	.023	保護	.026
未熟	.023	成長	.025
素直	.015	援助	.017

(2) 「だから、乳児を保育する際は () が最も大事である。」

表 3 は、質問項目②に対する回答の特徴語を示したものである。

表 3 からは、2 つのことがわかる。まず、「愛情」という言葉が最上位の特徴語として抽出されていた。これは「子どもの保健」の授業では地域における保健活動や家族支援について学ぶ中で、健やか親子 21 (第二次) では『『すべての子どもが健やかに育つ社会』として、すべての国民が地域や家庭環境等の違いにかかわらず、同じ水準の母子保健サービスが受けられることを目指している。』ことが示されていることを解説したことが影響している可能性があるだろう。このような社会の支援を理解することにより、愛情が大前提にありながら、子育ての大変さへの支援の重要性を知ったのであろう。

次に、最終回では授業の最終回には初回に見られなかった「健康」や「命」という言葉が見られた。初回も最終回も、「安全」「目を離す (ことがない)」「見守る」「観察」「注意」のように、子どもの安全や見守りが大事であることを意味する言葉は出現していた。このように、最終回にだけ「健康」や「命」が登場したのは、保育は養護を基盤として教育を一体的に展開していく営みであるが、子どもの生命の保持の大切さを授業から学んだことが背景にあると推察される。

これは、「子どもの保健」の授業では子どもの病気に関する学びから、命を守る仕事であることを痛感したからではないだろうか。そのため、保育中に体調の変化や傷害等が発生した場合の対応など、臨機応変に対応しなければいけないことを理解した上で乳児保育を行うためには「健康」、「命」が特徴語の変化をもたらしたと推察される。

表 3 「だから、乳児を保育する際は () が最も大事である。」の特徴語

初回		最終回	
愛情	.120	愛情	.098
慎重	.089	健康	.069
優しい	.053	安全	.068
安全	.045	援助	.052
成長	.038	大切	.050
丁寧	.038	思いやり	.043
コミュニケーション	.038	観察	.035
目を離す	.038	命	.035
見守る	.037	環境	.035
信頼	.031	注意	.035

(3) 「乳児保育の授業を通して、あなたが最も学びたいこと (学んだこと) は何ですか。」

表 4 は、質問項目③に対する回答の特徴語を示したものである。

表 4 からは、2 つのことがわかる。まず、初回は子どもや乳児の「気持ち」という特徴

語が出現していたが、最終回は子どもや乳児の「病気」「健康」「予防」「体調」という言葉が出現していた。この違いは、「乳児保育」の関連科目である「子どもの保健」では、医学的なことや看護的なことを総合的に解説したことから、これまではイメージしていなかった乳児の病気や健康、体調管理などについて考えるようになったからではないだろうか。実際、学生と対話をしていても、入学初期には乳児と医学・保健とのつながりを意識した視点は希薄であったように思われる。

次に、初回でも最終回でも「発達」「成長」は共通して出現していた。これは、「子どもの保健」の授業において、子どもの身体的な発育や運動機能の発達、生理的機能の発達を学ぶことにより、保育所保育指針（2017）乳児保育に関わるねらい及び内容にある「健やかで伸び伸びと育つ」ためには、何を学び、養成校での学ぶ科目の繋がりを感じたからであろう。

表 4 「乳児保育の授業を通して、あなたが最も学びたいこと（学んだこと）は何ですか。」の特徴語

初回		最終回	
乳児	.361	子ども	.320
保育	.236	病気	.297
子ども	.197	発達	.177
気持ち	.177	健康	.097
成長	.119	関わり	.091
発達	.107	予防	.074
対応	.089	成長	.071
知識	.067	対応	.069
理解	.053	関わり	.065
心理	.047	体調	.064

4 総合的な考察

保育所等は社会の変化の影響を受けて、様々な変化を遂げている。以前の乳児保育の内容として小林（2018）は「おむつ替えやミルクを飲ませるなどお世話が中心であった」と述べているように、乳児保育の充実や保育内容が見直されるようになり、遊びを中心とした家庭と同じような雰囲気を保つように変化してきている。保育者は保育の質の向上を求められ、子どもの多様な感情を受け止め、温かく受容的・応答的に関わり適切な援助を行うことが求められている。

「乳児保育」の授業内容として「乳児・1歳以上3歳未満児の保育」となっている。そのため、0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラスの子どもたちの保育の実際と結びつけていく必要がある。特にアタッチメントと基本的信頼関係の構築については、乳幼児期の非認知的能力への大きな影響をあたえるとジェームス・ヘックマンの研究に

において指摘されている。目には見えない部分を感じて保育を行うための学びを必要としている。そのような保育について、秋田らは(2016)「日本では、『生活を生活で生活へ』という倉橋惣三の言葉に象徴されるように日々の戸外での活動や遊びを重視しており、『健康、人間関係、環境、言葉、表現』という乳児期に望まれる生活体験をもとにカリキュラムが構成されてきている」と述べている。日本の保育は伝統的に非認知能力を育む側面を大事にしていると明らかにしている。また、大方は(2017)「乳児保育は子どもや大人との関係性が重要な意味を持つ。生活適応活動を保育内容として位置づけることを確認しておきたい」と述べている。

保育所保育指針の改定により、乳児保育においては心身の発達の基盤が形成される極めて重要な時期であり、生活や遊びの様々な場面で主体的に周囲の人や物に興味を持ち、直接関わろうとする姿は、「学びの芽生え」といえるものであり、生涯の学びの出発点に結びつくものであると強調している。また、乳児保育の「乳児」においては5領域のように明確に分けられないことも多いことから、①身体的発達に関する視点、②社会的発達に関する視点、③精神的発達に関する視点での育ちの評価を行っている。

保育における養護及び教育は伝統的な日本の保育の方法を重視しなから、新たな保育への取組みを養成校としてどのように学生に伝えていくのかは大きな課題であろう。それらの事を踏まえて新カリキュラムの「乳児保育」は「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」となり講義と演習科目で学びを深めることが重要である。本研究において初回では子どもとの関わり方や乳児と幼児の違いなどがあげられていたが、最終回では「病気」、「健康」、「予防」、「体調」といった健康的視点が多くなっていることから、乳児保育を実施するにあたって、健康ということの重要性を学んだ結果と考えられる。杉野らは(2020)「多くの保育学生にとって保健や健康に関して不安な点が多い」と述べている。保育者にとって、健康に留意することは当然の責務となっていることを痛感することにより、学ぶべきことの多さに覚えられるのであろうかとの不安が現れている。

保育者を目指す学生にとって、前期の授業科目を学ぶことにより、健康に関する支援は、保育中はずっと行い続けていく必要があることを知り、子どもの健康について総合的に学んでいきたいと考えたのであろう。「乳児保育Ⅰ」の目標にある「3.3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育内容と運営体制について理解する。」の内容として3歳未満児の発育・発達を踏まえた保育士等による援助や関わり及び保育における配慮が挙げられている。そして「乳児保育Ⅱ」の目標に、「1.3歳未満児の発育・発達の過程や特徴を踏まえた援助や関わりの基本的な考え方について理解する。」の内容として「3.乳児保育における配慮の実際、(1)子どもの心身の健康・安全と情緒の安定を図るための配慮」が挙げられている。この項目は「子どもの保健」の到達目標(表1)にあることを全て学ぶことでより、乳児保育を実際に行う上では非常に役に立つことになることが明らかである。そのため、「乳児保育Ⅰ」、「乳児保育Ⅱ」、「子どもの保健」の授業

担当者は事前に連携し、具体的に授業内容を確認し反映することにより、授業が連動しより学生が理解しやすくなるのではないかと考える。短大生は 2 年間での学びのため教員間の連携による授業内容の充実がより一層求められる。

養成校においてもひとり一人への個別支援が必要であろう。保育の現場で必要とするスキルとして保育実践力を習得するために有効な教授内容についても検討していきたい。

5 結論と今後の課題

本研究の目的では、学生のもつ乳児保育に対する考えについて、養成校入学後と「子どもの保健」の全 15 回の授業後の変化を明らかにすることであった。具体的には、①「乳児とは（ ）な存在である。」、②「だから、乳児を保育する際は（ ）が最も大事である。」、③「乳児保育の授業を通して、あなたが最も学びたいことは何ですか。」(最終回では、「乳児保育の授業を通して、あなたが最も学んだことは何ですか。」)の 3 つを質問した。その結果、①授業の初回では、大人の支援を必要とする未熟な存在や純粹で無垢な存在という回答が特徴的であったこと、最終回の授業では子どもが大切な存在であるという回答が多くなっていたこと、②最終回では授業の最終回には初回に見られなかった「健康」や「命」という言葉が見られたこと、③最終回は子どもや乳児の「病気」「健康」「予防」「体調」という言葉が出現していたことが明らかとなった。

本研究では、質問項目を 3 つに制限して実施した。分析の経済性、また学生の回答負担を考慮してのことであるが、これら 3 つの質問項目以外の質問項目を用いて学生の乳児や乳児保育に対する考えをいっそう明確にし、それを踏まえた授業方法や内容、進展を今後も検討していく必要がある。

引用文献

- 秋田喜代美監修, 山邊昭則, 多賀巖太郎 (2016) あらゆる学問は保育につながる, 東京大学出版会, 1-408.
- 阿部和子 (2002) 乳児保育再考 4—0 歳児の保育室の環境について, 聖徳大学短期大学部研究紀要, 35, 15-21.
- 保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の見直しについて ～ より実践力のある保育士の養成に向けて～ (検討の整理)」2017 年 12 月 4 日
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/houkokusyo_1.pdf (参照 2022.2.2)
- 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説, フレーベル館, 1-459.
- 厚生労働省, 保育所保育指針, 平成 29 年告示

https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010450&dataType=0&pageNo=1

(参照 2021. 3. 16)

厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ」令和 3 年 4 月 1 日

<https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000821949.pdf> (参照 2022. 2. 2)

厚生労働省, 健やか親子第 2 次ホームページ

<http://sukoyaka21.jp/about> (参照 2022. 2. 3)

小林美花 (2018) 乳児保育の理解に向けた授業の考察, 北翔大学教育文化学部研究紀要, 3, 131-137.

村上博文 (2009) 乳児保育室の空間変成と“子ども及び保育者”の変化—K 保育所 0 歳児クラス: 自由遊び時間におけるアクションリサーチ, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 49, 21-32.

大方美香 (2017) 保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討—乳児保育研究 その 4—, 大阪総合保育大学紀要, 12, 19-42.

杉野寿子, 田中美樹, 吉川未桜, 中原雄一, 吉田麻美, 池田孝博 (2020) 保育士養成課程における保健・健康に関する学びの研究, 福岡県立大学人間社会学部紀要, Vol. 29, 1, 73-80.

田中裕・安梅勅江・酒井初恵・宮崎勝宣・庄司ときえ (2005) 長時間におよぶ乳児保育の子どもの発達への影響に関する 5 年間追跡研究, 日本保健福祉学会誌, 12 (1), 23-32.

上田七生 (2002) 乳児と保育者との愛着関係の発達及び変容過程—第一愛着対象者との愛着関係が不安定な乳児を対象に—, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 51, 359-363.

上田七生・藤木大介・山崎晃 (2020) 乳児 - 保育者間の愛着関係の形成過程 -相互作用の質的分析による検討-, 学校教育実践学研究, 26, 109-116.

初塚眞喜子 (2010) アタッチメント (愛着) 理論から考える保育所保育のあり方, 相愛大学人間発達学研究, 1, 1-16.

付記

本研究は第 73 回日本保育学会で発表した内容を加筆修正したものである。